

ところざわ倶楽部
文芸・歴史講座(1)

よしかず
「比企一族」と比企能員



↑ 鎌倉・妙本寺
← 比企一族の墓

2022. 7. 1 新所沢公民館 ホール
14:30~16:30 竹内好夫

2022年NHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」

平安末から鎌倉前期を舞台に、源平合戦と鎌倉幕府が誕生する過程で繰り広げられる権力の座を巡る駆け引きと、その勝利者で北条得宗家の祖となった北条義時を主人公に描く。タイトルの「13人」とは、源頼朝の死後に発足した集団指導体制である「十三人の合議制」を構成した御家人たちを指している。

「鎌倉殿の13人」

- ・ 北条義時
- ・ 三善康信
- ・ 二階堂行政
- ・ 足立遠元
- ・ 八田知家
- ・ 北条時政
- ・ 和田義盛
- ・ 大江広元
- ・ 中原親能
- ・ 梶原景時
- ・ 安達盛長
- ・ **比企能員(埼玉)**
- ・ 三浦義澄



比企一族とは…

平安時代末期から鎌倉時代前期にかけて武蔵国比企郡(現在の東松山市及び比企郡)を領していた源家譜代の(代々臣下として主家に仕える)豪族。藤原氏の出といわれるが系譜は明確でない。頼朝の父・源義朝の時代には比企遠宗がその御家人として仕えていた。

- ・頼朝の父源義朝は京都で「保元の乱」「平治の乱」に参戦しており、比企遠宗も早くから義朝に臣従して京都にいて、掃部允(かものかみ=従七位上)に任ぜられていた。
- ・遠宗は京都で下級官人の娘と結婚したと考えられ、「比企局」と名乗ったのであろう。遠宗の死後尼となり「比企尼」「比企禅尼」と称された。

ここで、**武士の発生**について

司馬遼太郎の話が参考になる。
『街道を行く』から引用。



三浦半島・伊豆半島・房総半島図



(司馬遼太郎「街道をゆく」四十二)

相模国(神奈川県)の三浦半島は、まことに小さい。《中略》
狭い上に、半島のほとんどが丘陵で、河川も細く短く、従って水田面積もすくなかった。都市が未発達のところは、水田の多寡によってその地域の人口の大小がきまる。当然ながら、三浦半島は人口も少なかった。
ところが、この半島から、**十二世紀末、それまでの日本史を、鉄と穂とたがねでもって叩き割ったような鎌倉幕府が出現するのである。**
なぜそうなったのか。そんな疑問を主題にして、この半島を歩こうとしている。
まず、**武士の発生のことである。**(続)

「三浦半島記」より引用 ①

(司馬遼太郎「三浦半島記」)

頼朝の父義朝は政治力はなかったが、篤実だった。鎌倉のあたりに所領をもち、半生、関東と京を往來した。その途中の熱田(愛知県)の大神宮家の城に頼朝を生ませた。
京では、主として京の摂関家に入入りした。摂関家は代々摂政関白家を継ぐ藤原氏のことで、その覚えもわるくなかった。
摂関家のほうからみれば、義朝は、「家人」だった。禄をもらっているわけではなかった。ただ藤原氏のおかげで、下野守という官職をもらった。位は従五位の下ぐらいいで、摂関家から見れば、きわめて卑い。
ときに平安朝は、崩壊しようとしていた。世の末は、人の心が、名利のために殺氣だつものらしい。
公家社会から崩れはじめた。
高殿で、床も抜けばかりのさわぎがはまったのである。摂関家の一族や公卿(三位以上の公家)とその父子兄弟ばかりか、天皇、上皇、法皇までが入りまじり党派をつくり、反目嫉視し合った。
異例なことは、たがいの党派が、手綱の武士をうそぶき寄せたことである。
平安時代を通じて、公家社会がその競争のために兵を使ったことはなかった。その不文律の禁がやぶられた。保元の乱(一一五六)と、その三年後の平治の乱が、それであった。
保元の乱では、崇徳上皇と藤原頼長が組み、義朝の父為義らを手むきませ、これに対し後白河天皇らは、義朝と平清盛を陸まきさせ(の)下までまねき、わが敵を討てと命じた。このとき、公家の世はおわったといつてよい。

<平安末期>

- ・藤原氏による摂関政治の衰え
- ・院政の開始(白河上皇)
- ・仏教にいう末法元年(1052年)
- ・天変地異の増大と社会不安

釈迦の死後

正法 → 像法 → 末法の世

飢饉・大火・疫病・強盗の横行・僧徒の争い・海賊・大風雨・他

慈円『愚管抄』

「鳥羽院ウセサセ給ヒテ後、日本国ノ乱逆ト云コトハヲコリテ後 **ムサ(武者)**ノ世ニナリニケルナリ」

日本史上初めて天皇家や臣下が分裂して争った、1156年の「保元の乱」は歴史上の転換点と言われる。**武士の登場**

「保元の乱」の対立

1156年(保元1)

<崇徳天皇派>

<鳥羽上皇派>

負

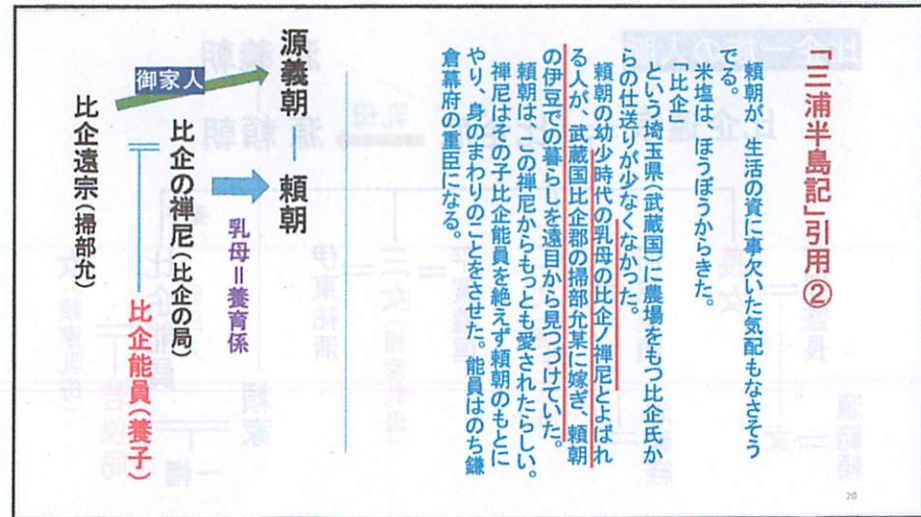
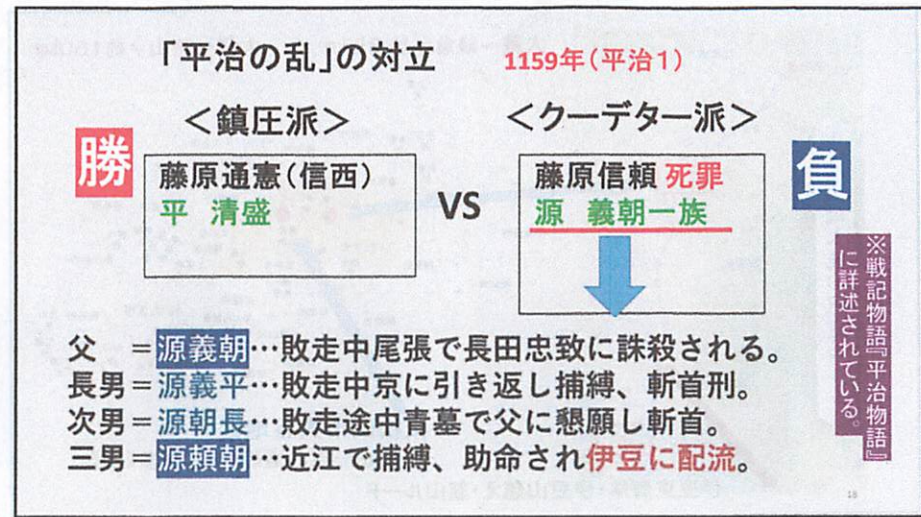
崇徳天皇
藤原頼長
源為義
平忠正

VS

後白河天皇
藤原忠通
源義朝
平清盛

勝

※ 戦記物語『保元物語』に詳述されている。



「比企の乱」
の勃発

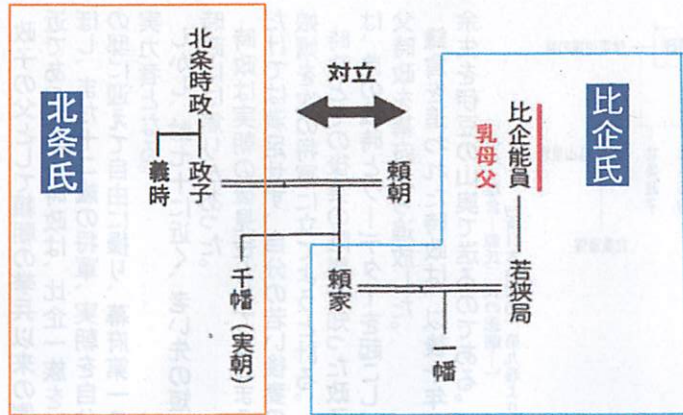
1203. 9. 2



源頼朝像

父母の期待と御家人たちの祝福を受けて誕生した頼朝は、この比企ヶ谷で源氏の御曹司として何不自由なく育てられる。頼朝が死んだ時、頼朝は十八歳の青年に成長していた。
頼朝は比企能員の娘若狭局を妻とし、一幡(いちまん)という子供をもうけた。頼家の後ろだてとして比企氏の勢力はいつそう強くなり、政子の実家北条氏と比企氏の対立が深まってゆく。破局は突然やってくる。建仁三年(一一〇三)、頼家が急病にかかり、危篤状態におちいったのをきっかけに北条時政は比企能員を自分の邸に誘い出して殺し、同時に比企の館を急襲して比企一族を滅ぼす。「比企の乱」である。

(「鎌倉—源氏三代の悲劇—」
『新日本史探訪』第九巻より)



比企一族滅亡の顛末 (『吾妻鏡』)

15ページをご覧ください。

前掲書からの引用(続き)

永井 作家・永井路子氏

永井 この事件は頼家の病気が重くなった時に起こりました。そのままいくと死ぬかもしれない、すると比企氏の若狭局が生んだ一幡が後を継いでしまう。これではならじというので、北条氏が強硬手段をとったのです。北条時政は、比企能員を、頼家の病気を癒す祈願をするという名目で、比企の館から北条の館へ招きまして、何も知らずに来たところを家来に命じてガツと後ろから取り押さえて殺してしまふんです。それと同時に、北条の館から比企の館に兵を差し向けます。不意をつかれた比企氏が態勢を立て直すひまもなく、館には火がつけられます。こうして、比企の館も、若狭局も、一幡も、すべて炎の中に葬られてしまふのです。



小説家。東京に生まれる。正確な時代考証と鋭い現代的感觉を併せ持つ歴史小説で、多くの読者を得る。「炎環」で直木賞受賞。他に「雲と風と」「北条政子」「つわもの賦ふ」など多数。1925~

その後の鎌倉は

政子の父として頼朝の挙兵以来の側近であった北条時政は、比企一族を滅ぼし、まだ十二歳の將軍、実朝を自分の邸に迎えて自由に操り、幕府第一の実力者となる。

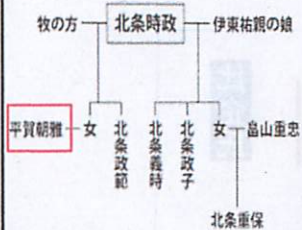
しかし、齢七十に近く、古い先の短い時政には焦りがあった。

時政は実朝の後見役としてとどまるだけでは満足せず、自分の若い後妻の娘婿を次の將軍に立てようとする。

時政とその後妻の陰謀を知った政子は、弟の義時とクーデターを起こし、父時政を幕府から追放した。

鎌倉を追われた時政は、以後十年の余生を伊豆の山奥で送るのである。

(前掲「鎌倉」源氏三代の悲劇」
『新日本史探訪』第九巻より)



若狭の局

比企能員の娘、比企の尼の孫である。二代將軍源頼家の妻として嫡男一幡、さらに竹の御所を生んでいる。吾妻鏡では比企一族滅亡の建仁三年(一二〇三)九月に、一方、愚管抄では、二月月後の十一月に息子一幡が殺されている。そのため若狭の局も、この時に殺されたと言われているが、比企の乱で女性

が殺された記述はどこにもない。各地に残る伝承や伝説では、彼女は殺されず、夫頼家の修善寺幽閉に付き添って行ったと言われている。しかし頼家が修善寺の筥の湯で入浴中に北条氏により誅殺されたため、(中略)修善寺を脱出し、武蔵国比企郡大谷に移り、そこに隠棲していた祖母比企の尼と共に頼家の法号を冠した寿昌寺を建立して比企一族と夫頼家公の菩提を弔ったという。そんな彼女も晩年は、寺の近く梅の古木咲く梅が谷に居を移して余生を送り生涯を閉じたと言承されている。

『探訪 比企一族』西村裕・木村誠 編・著
比企一族歴史研究会より

傍線=講演者

比丘尼山横穴群



比企郡に残る、比企一族に関する伝承の遺跡等をご紹介します。





④ 比丘尼山 (びくにやま) ※「尼」の意味

- ・比企遠宗の妻・比企尼(出家した比企局)が、夫亡き後草庵を結んだ場所。
- ・比企能員の娘「若狭局(わかさのつぼね)」が、夫・源頼家亡き後遺骨を埋葬し「寿昌寺」とした。「寿昌寺」は後に現在の場所に移され「宗悟寺」と改称された。
- ・横穴墓古墳があり市指定史跡となっている。



② 扇谷山 宗悟寺 (曹洞宗)

- ・源頼家の位牌が安置される。
- ・「比企一族顕彰碑」が設置されている。
- ・頼家の妻・若狭の局は亡き夫の遺骨を持ち帰り、比丘尼山に草庵を結んだ→「大谷山寿昌寺」
- ・「大谷山寿昌寺」は徳川家康の関東転封に伴い、ここを知行した旗本・森川氏の菩提寺となる。
- ・森川金右衛門は寺を比丘尼山から現在の地に移し「宗悟寺」と改名した。
- ・境内には森川氏累代の墓もある。

37

宗悟寺参道



38



39



40





串引沼

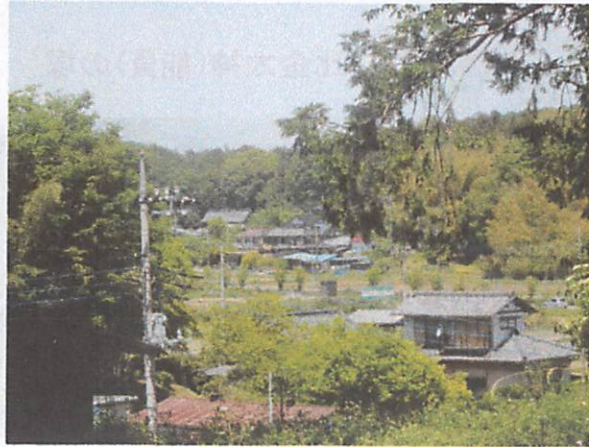
- 夫源頼家の菩提を弔っていた若狭局は、祖母比企尼の勧めで、心の迷いを去るためにこの沼に来て、夫の形見である(串)を投げ入れたという。



秋葉神社と梅ヶ谷

- 火伏の神を祀る。
- 松山町(東松山市)からの参詣者も多く今も「秋葉道」として残る。
- 江戸時代の領主・森川氏もこの神社を本郷の屋敷に分祀し江戸の大火の難を逃れたという。





梅ヶ谷遠望
若狭局が年老いて隠棲した場所という。

49



「平家物語・義経伝説の史跡を巡る」JHPより転載

東松山市・大谷地区
比丘尼山・宗悟寺・城ヶ谷・串引沼・梅ヶ谷など伝承が残る地

50



比企遠宗館跡 伝承地
比企郡滑川町大字和泉字三門
中央左手一帯が屋敷跡とされる

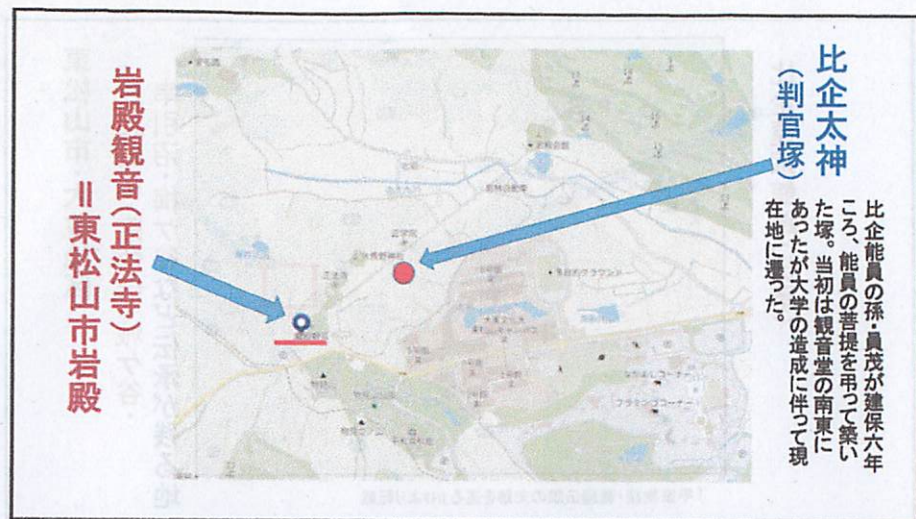
51

岩殿観音(正法寺)東松山市

養老年間に、沙門逸海が千手観音像を刻み開山し正法庵と称し、鎌倉時代初期に源頼朝の命で比企能員が復興した。(寺伝)



52



比企の乱をめぐつて 永井路子『つわものの賦』—血ぬられた鎌倉—(文春学藝ライブラリーより)

※「二万」||「二幡」(頼家の息子) ※※「千万」||「千幡」(頼家の弟、実朝の幼名)

一二〇三(建仁三)年八月二十七日、將軍頼家がいよいよ危篤に陥ったので、相続のことが相談され、関東二十八カ国の地頭職と惣守護職を※一万に、関西三十八カ国の地頭職を※※千万に譲ることになった。ところが一万の外祖父比企能員はこれに不満を持ち、千万およびその外戚である北条氏を亡きものにしようと、兵を集め始めた。かくて鎌倉には双方に味方する武士が群れ、騒然たる状態になってきた。

九月一日、頼家の病床につきそっていた若狭局が、頼家に訴えた。

「このままでは北条にやられてしまいます。一万の行末が心許のうございます。」

頼家は驚いて比企能員を招き、ひそかに北条討滅の計画を練った。ところが、この密談を母の政子が障子を隔てて聞きつけてしまった。政子は手紙を認め、侍女を走らせて、時政に急を告げる。折ふし御所を出て、名越にある本邸に帰る途中だった時政は、手紙を見て思案の末、大江広元の邸に寄って相談する。

が、広元の答は慎重だった。

「故將軍家の時以来、御政道の事については御助け申し上げて来ましたが、戦さの事は何とも……。ま、あなたの御判断でなさることですな」

「はいよく逃げをうったのである。時政はまだ決心がつかない。広元の邸を出たものの、まだ馬上で思い悩んでいたが、とうとう従っていた天野蓮景と新田忠常に計画を打ち明けた。

「やりましょう!」

二人は即座に答えた。

「なあに、能員のごときを討つのに、軍兵を動かす必要はありませんよ」

名越の邸に戻って、秘策が練られた。大江広元も迎えをうけて出かけてゆく。先刻態度を鮮明にしなかったので、広元の所から比企側に情報が漏れはしなかつたかと警戒し、口止めする意味で呼びよせられたものと思われる。慌しい動きがあった後、使いが比企能員の許に差し向けられた。

「將軍家の御病氣平癒祈願のため、薬師仏供養を行います。なにとぞ御来臨下されたい」
能員の息子たちは警戒して行くのを止めたという。

「どうしても行かれるのなら、相応の武装をし、家子郎従を従えてゆくべきです」

が、能員はそれを聴かず、武器もつけず、仏事にふさわしい礼装をし、数人の供だけ連れて出かけていった。能員が北条邸に入るやいなや、物陰にかくれていた天野蓮景と新田常忠は、やにわに彼の両手をむざと掴み、竹藪に引き入れて、刺殺してしまつた……。

このところの『吾妻鏡』の描写には息づまるようなものがあるが、中でもこの部分は、

「誅戮 ※踵ヲ廻ラサズ」

とこれ以上簡潔にはできない書き方でその一瞬を表現している。漢文の持つ迫力であろう(もつともこれには古典に似たような表現があるので手放しに感心もできないが)。

能員の非業の死を知った従者は、宙を飛んで比企の館に急を告げるが、時をおかず、「尼御台所の仰せ」をふりかざして、北条時政の子、義時ほか北条一族、小山、三浦、畠山らが攻めこんで来た。不意を衝かれた比企方の劣勢は蔽うべくもないが、それでも彼らは勇敢に戦い、攻め手にかなりの痛手を負わせた。戦闘は午後二時から四時頃までおよんだという。敗色の濃くなつて来たとき館に火が放たれた。その中で比企の息子たち、娘の婿たちも自殺し、若狭局も一万も炎の中で死んでいった。

※傍線部||「踵ヲ廻ラサズ」||短時間で事を成し遂げること。